

小野寺健著「心にのこる言葉—ベストセレクション 162」ちくま文庫、筑摩書房 2010 年 12 月 10 日刊を読む

The possession of a book becomes a substitute for reading it
From "New York Times Book Review, Dec. 4, 1966"

本を持つことが、読むことにとって代わる。

「ニューヨークタイムズ書評新聞」1966 年 12 月 4 月号より

1. 近頃の人には本を読まなくなった、読んでいない、とはさんざん聞かされていることだが、ほんとうにそうだろうか？書店はいつでも混んでいる。なるほど雑誌のコーナーで立ち読みしている人のほうが多い感じはあるが、文庫のところだって単行本のところだって、熱心に本を探している姿はいくらでも見つかる。
2. もっと印象的なのは図書館で、いつ行ってみても大盛況。座りこんで読みふけっている人もたくさんいるし、貸出、返却のコーナーに行列ができていないことはまずない。
3. これでも、世間の人には本を読んでいないと言えるのだろうか？
4. 本が多すぎて、どの本がおもしろいのか見分けにくいのと、ハード面の革新のスピードとともに感性も知らないまに変わるものだから、古典と呼ばれる本の「ムード」といったもの——単語の意味や響き、文章のスピード感などがつくりだす特有の感じとでも言えればいいか——にはなじめなくなっても、これは当然かもしれない。
5. むしろ、めずらしく古典を読んでいるという若い人に出会ったものの、とんちんかんな印象を聞かされて、「読んでいる」という実態を疑ったことがある。難解な言葉などはならべられるのだが、表面的な「教養」どまりで、人生や物の考え方といった肝心のことがわかっていない。これでは、現代の若者としてかえって不自然なんじゃないかと思ったりする。
6. 魅力を感じないのに義務感だけで読んだ本の内容は、身につかないし、すぐに忘れてしまう。だが、推薦されたにせよ自分で見つけたにせよ、何となく引かれる本はとにかく買って、積んでおくといよい。ある日、その背表紙に何となく引かれて手に取ってみると、そのままのめりこんでしまうということがよくあるのだ。

[コメント]

小野寺健先生の「心にのこる言葉、ベストセレクション 162」。本を読み込むとは、どのようなことかがよくわかる一冊。この本自体が心に染み込む。是非、御一読を。

— 2014 年 11 月 6 日 林 明夫記 —